釈正輪師インタビュー

問題生徒だった高校時代

正眼短大入学で人生転換

仏教の言葉・釈尊の教えをもう一度掘り起こし、私たちの人生・生活に生かすことができれば、混迷とした今の時代に何らかの指針となるに違いないという思いをもって、花祭り特集を組んでみた。今回紹介する釈正輪師は、非行の[illegible]にあって今の時代を象徴するような人生から[illegible]って、仏教者として[illegible]に出家した希有な人材で、その生まれ変わりの過程に感動する。特に若い青少年への感化という点で、ぜひ読んでほしいと思い、インタビュー記事を掲載する。

——釈先生は、非常に困難な境遇を体験して、出家された経験を持っておられ、現代のような多感な悩みを持っている青少年たちに大きな啓蒙になるのではないかと思っている次第です。まず、出家の動機からお聞かせください。

「僧侶になろうと思ったのは十八歳のとき、ある和尚様の著書により宗教の大学にお世話になったことがきっかけでした。私の父親は無神論で、私の育った環境は宗教とか信仰にはまったく無縁でした。しかし私にはよほどの因縁があったのでしょう、今日こうして僧侶となっております。

私の出家には二つの要因があります。一つは家庭的要因で不遇の環境であったこと、二つ目は先祖に僧侶の方が多かった家系的要因とでも申しますか」

——もう少し具体的に。

「とても恥ずかしく、恥ずべき内容です。先ほど家庭的要因と申しましたが、私の父はやくざ者で、人生の大半は刑務所暮らしでした。やくざ同士の抗争も幼少の頃から何度となく見てきましたし、むごたらしい死も目の当たりにしてきました。生活はいつも困窮し、そのため母は私が物心がつくかつかないかといった多感な時期より水商売に身を染めていました。一人っ子でいつも寂しい思いをしてきました。出家は祖父以降、どういうわけか、[illegible]の父をはじめ、長男、三男、長女の彼がやくざ者に身を落としております」

——少年時代、そうとう荒れていたと聞いていま[illegible]

「不純な環境の中で[illegible]まで不純になっていく自分を冷静に受け止めていた記憶があります。しかし青春期ともなると、このやるせない思いは暴力という形で爆発しました。そこで私は、自身の性格を[illegible]で[illegible]する努力をいたしました」

——先生の家庭的要因は分かりましたが、それがどのような形で出家と結びついていくのですか。

「不遇の環境が出家を招いたのではなく、人生[illegible]において仏縁を頂いたのです」

——どういうことですか。

「宗教系の大学に入学したことが転機だったと思います。この大学とは禅宗（臨済宗）の正眼（しょうげん）短期大学といい、岐阜県美濃加茂市の[illegible]専門道場の[illegible]師が人間をつくりたい」と[illegible]で始められた所でして、[illegible]を自ら全国托鉢されながら、自分の書画・墨跡を売って、もちろん地域の方々に援助を受けながらつくった所です。

教授陣たちも素晴らしく、老師の教育方針を意気に感じられ、その道では著名なそうそうたる人たちがメンバーとして加わっておられました。また多くの先生方が無報酬で教鞭を執っておられました」

——感動的な話ですね。

「この大学入学に関しては、数奇な運命が関与しています。私は高校時代数多の暴行事件で少年鑑別所（送致）されるばかりになっていましたが、わが家族の事情を[illegible]ら当然のごとく退学となるべきところだったのですが、何せにも私は、高校へは剣道の特別推薦生徒で入学し、国体、インターハイ等で数々の優秀な成績を収めた経緯がありましたから、何とか[illegible]は免れることができたのだと思います。

私の暴行というのは高校[illegible]といった先輩や、暴力団との喧嘩は日常茶飯事でした。また親の責任により学校や家にまでやくざ者、同業の取り立て屋はおろか、毎日のように刑事が事情聴取に来ました。普通の学生の域を遥かに逸脱していたんです。だから友人が避けるわけです。怖くてね。それでも私は学園生活では極力平静を装い、積極的に友人を作ろうと心掛けてはみるものの、気がつけば一人も友はいませんでした。

ついには教師までも私を無視するほどで、学校へ向かう足は遠のくばかりで、この時ほど運命を呪ったことはありません。学校側は退学か留年かの意見が分かれたそうで、留年すれば学校側にも迷惑が掛かる[illegible]う考えたそうです」

——個人の人格よりも体面を選んだのですね。

「教育現場の矛盾です。少しでも親身になってくれる教師がいてくれたら、私の人生も変わっていたかもしれませんが」

——高校の教師が釈先生の講師をしていたとか。

「はい、私立高校の教員をしておりました。教職の道筋についても理解をいただいたのですよ」

——具体的には[illegible]として何を教えていましたか。

「現代国語と宗教教育でした」

——短期大学では何の教[illegible]

「宗教概論として宗教史と宗教教育を講義しておりました」

——教師をなさったことは、自身の体験に何か関係しますか。

「大いに関係がございます。教える者と学ぶ者との信頼です。教師は親子の絆のごとく、生徒の善き部分も悪しき部分もすべて受け止める、全部ひっくるめて本人の善き部分（能力）を最大限に伸ばしてあげなくてはいけません。つまり個人の個性を学術と集団の協調において開花させてやるべきなのです。しかし一般の教育の場は安易です。私の場合、そのどれも欠損していましたから、成人してもしばらくの間トラウマ（心的外傷）となって残っていました。

留年はしますが、特別単位は取得すれば卒業させてやるという条件で個人授業を受けることになりました。預けられた寺から高校[illegible]

——校長先生は厳しい方だと聞いていましたが。

「厳しいというより[illegible]深い方でした。少年の心を持った優しい方ですよ。そこで卒業、京都の仏教大学に入りましたが、仏教を学問としてとらえることに抵抗を感じ、中退。[illegible]する臨済宗[illegible]の門[illegible]となり、禅の修行に志すことにしたのです」

——正眼[illegible]は素晴らしい教育方針をもっていたようですが、どういうところに影響がありましたか。

「まず短大ですから、二期生までです。一期生が三十人、二期生が三十人で、全校生六十人の小さな学校です。校舎も小さな寺だったんです。で、一期生、二期生の中でも、それぞれ三部生に分かれていました。一部生がお寺の息子さんたちですね。二部生が企業の後継者、将来企業の中間管理職、あるいはトップに立つ方々ですね。一流大学を出ていて、精神を鍛えていくということで、会社の派遣で来るわけですから、企業の派遣社員で来ている優秀な人材ですね。年上の人もいましたし、東大、ハーバード大を出た人もいました。三部生がわれわれのような一般学生ですよ。表向き一般学生と言っても、どうしようもない連中でしたね。それが非常にユニークだったんです。

例えば、小指のない元組員もいれば、陸上自衛隊の特殊部隊の教官をしていた者もいて、彼などは歌舞伎町で暴力団の人を半殺しにし、警察沙汰となり、東京拘置所にいる最中、托鉢中の老師に拾われてそのまま弟子となった人間です。世間には上には上がいるもので、一回生全体はさながら猛者の集団でした。老師はそういった人間を殊の外かわいがって

高賀山の千日回峰行で入峰のとき法螺を吹く釈師

釈　正輪師

日本大摂禅寺主事　釈正輪

（本名　[illegible]）

一九五九年東京都生まれ。正眼短期大学宗教学部禅学科卒業、佛教大学文学部仏教学科中退。中部地方の霊峰高賀山開山堂で空海師を師にもつ。妙心寺派「正眼短大学長」故梶浦逸外老師、妙心寺派「花園大学学長」故大森曹玄老師に師事。禅・書画・天台も各宗を修禅する。また、高賀山においては「千日回峰行」を満行し、前人[illegible]の荒行「大衆生」ならびに山岳回峰「六社巡り」を満行。その後、故マザー・テレサに会い、メッカを巡礼、北朝鮮訪問などをする。高校教師、短大講師、天台宗門下本山布教師、現在は日本大摂禅寺主事、単立宗教人権救済[illegible]、事務局[illegible]。著書『偉大なる母たち』『[illegible]』ほか。

花まつりとは

四月八日は花祭り。釈尊の誕生を祝う行事で、かつては民俗的行事であった。「仏生会（ぶっしょうえ）」「潅仏会（かんぶつえ）」「降誕会（ごうたんえ）」ともいう。この日は、ちょうど桜の咲く、一番良い季節で、花祭りにふさわしい。最近では、四月八日の前後の日曜日に行うようになった。

この日は、まず僧侶たちと稚児たちが行列を組んで、誕生仏の安置された花御堂と白象を引きながら練り供養する。そして釈尊の誕生を祝う法要を営り行い、[illegible]参詣者が誕生仏に甘茶をかける。

四月八日に釈尊が誕生したとするのは、チベット、ベトナム、中国、韓国、日本に伝わった大乗仏教で、タイ、カンボジア、ミャンマー、スリランカなど南方に伝わった上座部仏教（小乗仏教）では、紀元前の四月のヴェーサーカ月の満月の日であったとされ、陽暦でいえばだいたい五月ごろである。誕生年についても、中村元博士によれば、紀元前四六三年としており、上座部仏教とは食い違っており、定説はない。

釈尊は今のネパール国の南に位置するルンビニー園で誕生された。この誕生地は、アショーカ王の記念碑が発掘されて、現在は特定されている。当時は花々美しい園であったという。釈迦族の母マーヤーが出産のために里帰りする途中、この園で休み、イチジクの花の枝をとろうとしたとき、マーヤーの右脇から生まれたと伝えられる。

生まれた釈尊は四方に七歩歩いて右手は天を、左手は地を指さして「天上天下唯我独尊」と宣言したといわれる。ルンビニー園[illegible]花御堂に安置された誕生仏[illegible]その姿を表している。

母マーヤーは白象が自身の体内に入る夢を見て、釈尊を生んだとされ、花祭りに白象を作って引いて練り供養するのは、それを記念するためである。

甘茶を灌（そそ）ぐのは、釈尊の誕生を喜んだ龍王が甘露をそそいで、産湯としたとする伝説によるもの。

東京浅草・金龍山浅草寺の幼児らの花祭り練り供養